

廣瀬淡窓の詩論における「精思研窮」の意味——君子修養のための漢詩教育

白石真子

はじめに

廣瀬淡窓（一七八二—一八五六）は、豊後国日田・咸宜園を開塾した人物として知られる。淡窓は咸宜園において、『詩』『書』をはじめ、四書、諸子百家、歴史書など様々な分野のものを教科書としたが、そこに、『唐詩選』や、淡窓の詩集である『遠思樓詩鈔』などを教材とする漢詩教育を設けた¹。門人たちと詩会を開き、詩作を行い、果ては、門人たちの詩を『宜園百家詩』としてまとめたことは、詩を「書く」ことが咸宜園の教育において重要な意味を持つていたことを物語っている。私自身の問題意識は、若者たちに漢詩教育を施すことに、淡窓がどのような意味を見出していたのかという点にある。さらにいうならば、淡窓における漢詩教育の意味が、先行する世代（たとえば古文辞学派）のそれとどう異なるのかという点にある²。

淡窓には、『淡窓詩話』上下巻があるが、これは、淡窓の後継者の一人・青邨が³、明治期になって、淡窓の生前の詩論（主に『夜雨齋筆記』『醒齋語録』が出典とみられるが、出典が明らかでないものもある）をまとめたものである。本稿では、『淡窓詩話』はもとより、広く淡窓の著作を検討することで、まずは、その教育の基盤となる淡窓の詩論を検討するところから始めたい⁴。

但だ、注意したいのは、淡窓の著作の扱いである。というのも、淡窓は折に触れて自著を顧みており、その際、自己の思考の変化に敏感

かつ自覚的であるためだ。

たとえば、淡窓には、「論詩 贈小関長卿中島子玉⁵」という五言古詩がある。この詩中、淡窓は、「歌詩写情性」（詩は人の情性を表現するものである）という考えのもと、江戸における「詩」の変遷を振り返り、様々な弊害を列挙したうえで、「誰明六義要 以起一時衰」（誰が詩の原点である六義の大切さを明らかにし、詩の救世主となるだろうか）と発言している。これはもちろん、自身がその役割を担うと表明しているのだが、この論から二〇余年後、門人がこの点について質問した際には、次のように答える。

問 先生詩論詩ノ結末ニ、「誰明六義要 以起一時衰」トアリ。如何ナル処ヲ以テ、今時ノ衰ヲ起シ玉フヤ。
予カ詩ヲ論スルノ詩ハ、二十年前ノ作ナリ。此時壯年ノ客氣未ダ除カズ、一家ノ説ヲ唱ヘテ、当世ノ弊風ヲ矯メントスルノ意アリ。関・島二子ニモ、其ノ旨ヲ諭セリ。故ニ二時ノ衰ヲ起スノ言アリ。今ハ其念断テナシ。（『淡窓詩話』上）⁶

淡窓は当時、詩壇を担っていくと息巻いていた自分を振り返り、今はそのようなはやる気持ちはないという。

あるいは詩作においても自ら次のように振り返る。

遠思楼前編ハ後編ノ渾成自然ナルニ如カズ。後篇ハ前編ノ巧緻精密ナルニ如カズ。（『淡窓詩話』下）

D 性靈的性情説（袁枚一七一六—一七九七）

『遠思楼詩鈔』前編は、細部にまで緻密な表現があつて後編よりもよく、後編は、おおらかさがあつて前編よりもよいと、自作の詩を自らそう評している。このことは、淡窓が自らの作風の変化を認識していることを示している。岡村繁はこの点について、「淡窓の詩風は、ほぼ五十歳過ぎを境界として、巧緻精密な詩風から渾成自然な詩風へと変質したわけである。これは、彼が老熟の境に入ったためであろうか。私が見るところ、読む人の心を打つ彼の秀作は、むしろ初編の方に多いのではないかと思われる」という。読者としては（秀作か否かは置くとしても）、淡窓の言葉とおりに、五〇歳前後での変化が実際に感じられるということになる。

従つて、淡窓の詩論を検討するうえは、その時点ではそうであつても、一所に常にとどまるものではないという視点をもちておく必要があると考へる。

一、淡窓「詩論」の形成と背景

1 江戸詩壇の変遷と淡窓の「詩論」

江戸詩壇に影響を与えた、明清の代表的詩論として、次の四つを挙げるのが一般的である。

- A 格調説（李攀龍一五一四—一五七〇）
王世貞一五二六—一五四〇）
- B 性靈説（袁宏道一五六八—一六一〇）
- C 神韻説（王士禎一六三四—一七一一）

淡窓は、自身の詩の学びの変遷を『懷旧楼筆記』に記している。¹⁰ 中には、淡窓が当初、明代古文辞派（殊に李攀龍）を祖とし、それを受容した徂徠学派の「詩論」を手本としたことがわかる。よつて、『唐詩選』のみを読むことが十五歳まで続いたという。李白、杜甫、王维、孟浩然ら古文辞学派が推奨する詩人の詩であつても、『唐詩選』不掲載のものは読まなかつたというのであるから、徹底している。一五歳の冬、宇都宮由的（逯庵）が注釈をつけた『杜律標註』を手に取り、杜甫の詩の味わいを知つたという。筑前・亀井塾の門を叩いたのもこの頃（十六歳）である。淡窓は、大病で退塾帰郷する十九歳まで亀井南溟・昭陽父子に師事したが、その詩風は「享保諸家ト大同小異」、つまり、「格調説」を重んじる徂徠学派と同じであつたという。当時、淡窓と同門の者たちもまた、「時二古処大年ハ青蓮ヲ学ビ、雲来ハ子美ヲ学フト云ヘリ」とあり、亀門においては広く李白（青蓮）と杜甫（子美）が中心に読まれたことが分かる。淡窓の「詩」の論理はこうして「格調説」から始まつた。

しかし、淡窓は徐々に多様な「詩」の存在に気づく。淡窓十八歳の冬、『唐宋詩醇』を目にする。

予是ニ於テ、恍然トシテ、始テ詩道ノ広大ナルコト、明ト盛唐トノ外ニ、中晩アリ。中晩ノ外ニ宋アリ。皆捨ツヘキモノニ非ルコトヲ悟レリ。其時蘇陸二家ノ詩ヲ讀ミテ、已ニ其味ヒヲ愛シタリ。
…其後二十二歳ノ時ニ至リ、予モ又詩醇ヲ得テ、之レヲ熟読シ、作ル所ノ詩モ、又随ツテ一変セリ。（『懷旧楼筆記』）

『唐宋詩醇』は李白、杜甫、白居易、韓愈、蘇軾、陸游ら六人の詩二

千余篇がとられた清代（乾隆一五・一七五〇年）成立の詩集で、淡窓にとっては開眼の書といってよい。この後、盛唐詩のみならず、宋、明、清にまで読「詩」の対象が広がって行く。そして次のような考えに至るのである。¹³

抑と正徳・享保ノ詩ハ、格調アリテ性情ナク、天明以後ノ詩ハ、性情ヲ主トシテ格調アルコトヲ知ラズ。是レ皆一偏ニシテ、中ヲ得ザルモノナリ。予ガ好ム所ハ、性情ヲ主トシテ、格調ヲ廢セス。二ツノモノノ中ヲ取ルナリ。（『淡窓詩話』上）¹⁴

一八世紀、徂徠学派を中心とした「格調説」、その流れに反発して起こった一九世紀前半の「性靈説」への移行を見定め、自分は、「性靈説」を主としながらも、「格調説」を廢するものでもない、折衷の考えを提示する。

一般に淡窓は「神韻説」と評されてきた。「性情」を主とし、さらに「格調」も求めるという双方を折衷した方、及び、淡窓の「詩論」に見える「風神」「風趣」「気韻」などの術語や内容からすれば、「神韻説」に軸足を置いているとみるのは自然である。この点については嘗て太田青丘がこう述べている。

彼の傾向は明かであつて、之を大体神韻派と見做すことも許されよう。：彼が特に陶王孟章柳の五家を標榜し、神韻詩家を以て任じなかつたのも、既に清の翁方綱・袁枚等も指摘してゐる如く、神韻派の亜流がともすれば平淡に陥り易き弊を警戒するが為ではなからうか。¹⁶

太田の指摘にもあるとおり、淡窓が「神韻派」であると自任する記述

は見えない。しかし、太田の指摘以降、淡窓の詩論は「神韻説」と目されてきたのである。¹⁷

ちなみに、「神韻説」の「神韻」とは、趣がよいほどの意であろうが、その提唱者である王士禎（一六三四—一七二一）は「神韻」という言葉が次のように述べる。

汾陽の孔文谷云ふ、「詩以て性を達す。然るに須からく清遠尚しと為すべし」と。薛西原 詩を論ずるに、独り謝康樂・王摩詰・孟浩然・韋応物を取るのみ。言ふところは、「白雲抱幽石、緑篠媚清漣」は、清なり。〈表靈物莫賞、蘊真誰為伝〉は、遠なり。何ぞ必ずしも絲と竹と、山水にのみ清音有らんや。〈景昃鳴禽集、水木湛清华〉は、清遠 之を兼ねるなり。総て其の妙 神韻に在り。神韻の二字、予 向きに詩を論ずるに、首め学人の為に拈出す。此れより先見を知らず。（『池北偶談』卷十八）¹⁸

孔天胤（嘉靖一一年の進士）、薛蕙（正徳九年の進士）はともに王士禎より百年程前の人である。王士禎は、自らの「詩論」を総括して「神韻」という言葉を拈出したが、既に自分と同じ意図で使用された言葉であったという。奇しくも、王士禎が唱えた「神韻説」は、清遠の趣（きよらかでゆったりした趣）を重んじ、ここに列挙された謝靈運、王維、孟浩然、韋応物もまた王士禎のよしとする詩人たちであった。淡窓もまたその趣をよしとし、様々な詩を評する中で「神韻説」の術語を用いている（後述）。一方、淡窓には「神韻派」であると自任する発言はない。その理由は果して、太田青丘のいう「神韻派の亜流がともすれば平淡に陥り易き弊を警戒するが為」であろうか。淡窓の詩論を理解するうえで、この理由を考へてみることは大切であり、以下で検討して行きたい。

2 「詩の要訣」

淡窓は「詩の要訣」という言葉で、自らが考える詩の重要なポイントをまとめている。まずは整理しておこう。

南肥沢村の九門 来りて詩訣を問ふ。大人 詩を以て之に答へて曰はく

彫績 争ひて裁つ 織巧の詞

東方の詩の教へ 久しく陵遅たり

君 唯だ 真の情性を失うこと勿かれ

両宋三唐の之く所に任ずるのみ

（『六橋記聞』巻七¹⁹）

「南肥沢村九門」が誰であるか確定できないが、熊本藩家老・沢村家の誰かを指すのであろうか。²⁰この人物が、淡窓に「詩の要訣」を問い、淡窓は七言絶句で答えた。「詩を書くために 先を争つて織細で巧みな詩詞を選定する。日本の詩の教えは 長い間に徐々に衰えてきている。君は 詩に思いを込めればいいのだ。北宋・南宋、盛唐・中唐・晩唐の詩にある境地を目指さなくてはならない」。転句「君唯勿失真情性」。これは淡窓がとても大切にしている点であり、神韻説の提唱する「詩以達性」に同じだ。ちなみに、ここで「三唐」を「盛唐・中唐・晩唐」と解したのは、『懐旧樓筆記』巻八に拠る。²¹もう少し詳細に見てみよう。

秦韶問、先年人アリ、先生二問フニ、詩ノ要訣ヲ以テス。先生自ラ書シテ与ヘ玉ヒシ語アリ。「詩無唐宋明清、而有巧拙雅俗。巧拙因用意之精粗、雅俗係著眼之高卑」ト。小子未タ此語ノ旨ニ通セス。願ハクハ此レヲ詳ニシ玉ヘ。

答テ曰、世人詩ヲ作ルニ、多クハ唐宋ヲ區別シ、党ヲ分チテ相攻

ム。此レ明清門戸ヲ別ツノ悪習ナリ。四代ノ詩同シカラスト雖モ、各其佳境アリ。何レニテモ己カ好ム所ニ随ヒテ可ナリ。故ニ四代差別ナキニハ非レトモ、可否ヲ取捨スルニハ及ハス。是ヲ以テ、

「無唐宋明清」ト云ヘリ。扱時代ノ差別ハセサレトモ、巧拙雅俗ノ差別ハスヘキコトナリ。拙ハ巧ニ及ハス、俗ハ雅ニ及ハス。故ニ

「有巧拙雅俗」ト云ヘリ。サテ拙ヲ去ツテ巧ニ就カント思ハ、意ヲ用フルコト粗ナレハナリ。故ニ「巧拙因用意精粗」ト云ヘリ。俗ヲ去ツテ雅

ニ就カント思ハ、眼ヲ著クルコトヲ高クスヘシ。其俗ナルモノハ、眼ヲ著クルコト卑ケレハナリ。故ニ「雅俗係著眼高卑」ト云

ヘリ。四句ノ大意、意ヲ精シク用ヒテ、眼ヲ高キニ著クヘシト云フコトナリ。意ノ用ヒ方ヲ精シクスルコト、推敲鍛錬ニ在リ。：

眼ヲ著ルコトヲ高クセントナラハ、古詩ヲ熟読シテ、之ヲ品目スルニアリ。コレハ悟境ニテ、言ヲ以テ尽スヘカラサレトモ、古人

詩ヲ品スルノ一隅ヲ挙ケテ、コレヲ示スヘシ。（『夜雨寮筆記』巻四、『淡窓詩話』上）以下「引用A」と略す

門人・秦韶は、嘗て淡窓が書いた「詩の要訣」の意味を問うた。その要訣とは、「詩には時代の別はなく、巧拙、雅俗があるだけだ。上手

い下手は、心をきちんと用いているか否かにより、雅か俗かは、着眼

点が高いか低いかによる」というものであった。

淡窓は問いに答えて、先ず、どの時代の詩がよいかではなく、自分が

善いと思うことに従うべきとする。ただしその善し悪しは偏に「巧拙」と「雅俗」によるものであり、勿論、善い詩には「巧」と「雅」が存

在しているという。

さらに、「巧」であるためには、心を繊細に用いる必要があり、こ

れは「推敲鍛錬」によつて培うことが可能である。他方、「俗」を去り「雅」に達せようとするならば、詩を見る目が高くなってはならず、「古詩を熟読」し、論評、格付けなどを実践することによつて始めて「雅」に達することが可能となる。つまり淡窓は、詩の善し悪しを左右することとなる「巧拙」「雅俗」のうち、「巧」は、詩を「書く」ことによつて培われ、他方、「雅」は、詩を「読む」ことによつて養われると考へていることが分かる。

このことは門人・中川玄佳が作詩について質問した中にも見える。予嘗て曰、「詩無唐宋明清、而有巧拙雅俗。巧拙因用意之精粗、雅俗係著眼之高卑」ト。予ガ詩ヲ論スル、此外ニ在ルコトナリ。故ニ詩ヲ学ブ者ハ、務メテ其才識ヲ養フベシ。オラ養フハ、推敲鍛錬ニ在リ、識ヲ養フハ、古人ノ詩ヲ熟読スルニ在リ。前論述セシガ如シ。後世詩ヲ読ム者、務メテ古人ノ佳語ヲ剽掠シテ、己ガ有トセントノミ思ヘリ。明・清、晩近ノ詩ヲ読ムニハ、其通ノ心得ニテモ心苦シカラズ。宋以前ノ詩ヲ読ムニハ、初ヨリ其通ノ心得ニテハ益ナシ。只何トナク熟読シテ、其風味ヲ知ルニ如クハナシ。漢魏ノ高古ナル、六朝ノ精麗ナル、唐人ノ温ニシテ腴ナル、宋人ノ冷ニシテ瘦タル、其他太白ガ飘逸、子美ガ沈鬱、王・孟・韋・柳ガ清微淡遠ノ類、何レモ能ク味ヒテ、其差別ヲ知ルベシ。如此ナレバ、古人ノ風神氣韻、自然ト我心ニ移リ、其語ヲ出スコト、高雅ニシテ、俗趣ニ墮チズ。是レ見識ヲ養フノ道ナリ。今ノ人詩ヲ作ルニ急ニシテ、詩ヲ読ムニ遑アラズ。故ニ才余リアリテモ、識足ラズ。古人ニ及バザル所以ナリ。(『淡窓詩話』下、以下「引用B」と略す)

淡窓はここでも「引用A」同様に、嘗て自らが発した「詩無唐宋明清

…」という詩論を取り上げたうえで、「推敲鍛錬」、「古人ノ詩ヲ熟読」することの大切さを繰り返すが、「引用B」は、「引用A」と併せ読むことで、更なる深意が了解される。すなわち、「才」を養うには、「巧拙」を担っている「推敲鍛錬」に励む必要があり、これが、詩を「書く」ための極意となる。他方、「識」(見識)を養うには、「雅俗」を判断するために必須の、古人の詩を「熟読」することが肝要となるという主張である。

興味深いのは、「引用B」において淡窓は、今人が詩を「書く」ことに性急過ぎ、詩を「読む」こと、つまりは「見識」が足りないこと、そして、古人に及ばないことは、ここに理由があると、自分の門人たちに警鐘を鳴らしていることだ。

淡窓は、「務メテ古人ノ佳語ヲ剽掠シテ、己ガ有トセントノミ思ヘリ」と、徂徠学派(格調説)が、古詩の佳句を真似、それをを用いて詩作することに躍り上がったことを批判している。古詩を「読む」在り方として、徂徠学派のそれはだめだということである。淡窓は、そもそも明・清の詩と、宋詩以前の詩とは、詩の読み方が異なるという。淡窓のいう「其通ノ心得」という言葉の意味は少し不明瞭ではあるが、「明・清、晩近ノ詩ヲ読ム」には「其通ノ心得」でもまあよいが、「宋以前ノ詩ヲ読ム」には「其通ノ心得ニテハ益ナシ」という。そこから推せば、読詩の方法として時代が近ければ自分の常識的な理解でもよいが、時代が隔たるとそうは行かないということか。

そして何より、「引用B」にあるとおり、淡窓の「読む」ことの特徴は「只何トナク熟読シテ、其風味ヲ知ル」のがよいとするところにあると私は思う。ただ読み味わうべきという、この断定的ではない物言いはとても特徴的で、淡窓は、詩人それぞれの「差別」(違い)を知るべきであり、そういう「見識」を養うことによつて、「古人ノ風神氣韻、自然ト我心ニ移リ」、「雅」が醸し出されるといふ。ちなみに、

「風神」「氣韻」などの術語は、「神韻説」で使用されるものである。

3 「精思研窮」

以上のように、淡窓の詩論では、近年の「才」偏重、及び「識」不足への懸念が繰り返し説かれている。²⁵ 咸宜園における漢詩教育の研究において、「詩」は、特に「書く」という点に注目されるが、他方、詩を「書く」ことに偏りがちな門人たちに、古詩を「読む」ことの大切さを説いていることは、淡窓が「書く」ことと「読む」ことの意味、効能の違いを明確に意識した上で、双方ともに大切と、考えていたことが分かる。そこで前述の資料の中でも、次の一節に改めて注目しておきたい。

○眼ヲ著ルコトヲ高フセントナラハ、古詩ヲ熟読シテ、之ヲ品目スルニアリ。コレハ悟境ニテ、言ヲ以テ盡スヘカラサレトモ、古人詩ヲ品スルノ一隅ヲ挙ケテ、コレヲ示スヘシ。(引用A)

○識ヲ養フハ、古人ノ詩ヲ熟読スルニ在リ。(引用B)

この一節から掘り下げて考えておきたいのは、次の二点である。一つは、古詩（古人の詩）を「熟読」という点である。多読ではなく、「熟読」とは具体的にはどういう意であろうか。また一つには、「悟境」とは、どのような境地をいうのであろうか。

江戸の詩壇において、殊に一八世紀古文辞学派以降の共通認識として、嚴羽『滄浪詩話』は大きな意味を持っている。この点については淡窓も、「詩二禪ヲ以テ譬トスルコト、嚴滄浪ニ始マレリ。」(『淡窓詩話』上)²⁷との認識を示したうえで、「意味ノ心ニハ解スヘクシテ、口ニハ言ヒ難キ所アルヲ、會得シタル、即チ悟ナリ」(同前)としている。

淡窓は「悟」を具体的に説明し難い理由の一つとして、「心で解するもの」というが、又次のように、人それぞれに「悟入」する内容は異なるともいう。

人各おの悟入する所有り。帆鵬卿曰く、「和人、文を作るや、譬ふれば、彌猴演劇の如し、以て奇と為す可く、以て巧と為す可からず。」是れ鵬卿の悟入する所なり。予嘗て曰く、「詩文能く読者をして倦まざらしめば、乃ち名家と称す可し。」是れ予の悟入する所なり(『六橋記聞』卷三)²⁸

淡窓は、かの帆足万里(一七七八—一八五二)が得た境地は、「日本人が詩文を書くということは、たとえるならば猿芝居のようなものであるから、趣が異なるものがよく、巧みである必要はない」というものであったという。一方、自分は、「読者に飽きさせない詩文を書くことができれば、名家である」という考えに至ったという。

「悟」についても少し詳細にみておこう。

悟ノ道ハ、師モ言ヲ以テ、弟子ニ授クルコト能ハズ。唯学人ノ精思ヨリシテ得ル所ナリ。若シ悟ヲ得ント欲セバ、精思研窮スルノ外ナシ。予詩ヲ学ヒシヨリ四十余年、今日ノ得ル所、大抵悟入ナリ。然レドモ禪ノ所謂頓悟ト云フガ如キトコハ稀ナリ。皆功ヲ積ンテ、自然ト其意ヲ得タルノミ。今悟ヲ得ント欲セバ、先ヅ古詩ヲ熟読スベシ。乃チ李ガ飄逸トハ、何レノ処カ是レ飄逸、杜ガ沈鬱ハ、何レノ処カ是レ沈鬱、其他何レノ処カ是レ高古、何レノ処カ是レ清麗ト、古人ノ品目セシ所以ヲ考フベシ。如是ナレハ、其初ハ茫然タレドモ、後ニハ言外ニ其旨ヲ得ルナリ。已ニ古詩ノ味ヲ悟レバ、己レガ詩ノ意味モ亦明カナルモノナリ。試ニ己レガ詩

ヲ以テ、唐・宋・明・清諸家ノ詩ト並べ読ムベシ。其風神氣韻ノ同ジカラザル処、自ラ心中ニ了然タラン。然レドモ之ヲ未熟ノ徒ニ諭スコトヲ得ズ。是レ我悟境ナリ。(『淡窓詩話』上)²⁹

「悟」の道理は、弟子に言葉で教えられるものではなく、ただ、自身で「精思研窮」(よく考え本質を明らかに)することによってのみ得られるという。また、この「悟」とは、「悟人」であって「頓悟」ではないという。「頓悟」とは、一旦豁然と悟りが開かれることをいう。ならば淡窓の「悟」とは、「精思研窮」を積み重ねることによって、いつの間にか「古人ノ風神氣韻、自然ト我心ニ移」(引用B)るほどの意と解せられる。

李白や杜甫、あるいはそれぞれの詩人がそれぞれに評される理由を考えてみなさい。古詩の味わいを悟れば、自作の詩と並べて読んでみなさい。そうすることで、趣が同じでない箇所が心で分かるから、と淡窓は門人に教育する立場からこう述べているのである。

「引用B」において、「只何トナク熟読シテ、其風味ヲ知ル」のがよいとする、淡窓の断定的ではない物言いがとても特徴的であることに既に言及したが、「精思研窮」を門人に促す淡窓においてもそれと共通のものを感ずる。つまり、思索を重ね、研鑽を積むことで、見えてくるものがあればいい。何が見えてくるかではなく、その行為、過程に意味がある、との考えだ。だからこそ、ここで淡窓は、「予詩ヲ学ヒシヨリ四十余年、今日ノ得ル所、大抵悟入ナリ」と言い得たのであり、これが、詩に関する淡窓晩年の境地である。

二. 淡窓における「詩」の位置

1. 契機としての「眼病」

井上哲次郎が『淡窓全集』の序文で、淡窓が「思想家」となった(ならざるを得なかった)理由を次のようにいう。

淡窓は眼病を煩つて居つたから、力を読書に専らにすることが出来なかつた。そこで兎角瞑目暗想して思索の一方に向いた。さう云ふ所からして、一種の思想家となつたのである。³⁰

これは井上が、淡窓の「敬天」の思想に言及したものである。一方、このことは、淡窓が詩を「読む」ことにおいて、多読ではなく「熟読」を重ねたこと、「精思研窮」せねばならないという考えに至ったことの契機ともなっていると私は思う。淡窓自身、次のようにいう。

藤田吉問テ曰、弟子輩書ヲ読ムニ、数万巻ノ書、悉ク渉ルヘキニ非ス。其要ヲ撮ランコト、如何シテ可ナルヘキヤ。

答テ曰、人名天職アリ。読書専ナルコトヲ得ス。故ニ暇少キ者ハ、多ク書ヲ読ムコトヲ用ヒス……何ニテモ経子ノ中ニ於テ、己力深ク悦フ所ヲ取りテ、研究精思シテ可ナリ。若シ又閑暇アル者ハ、博覧ヲ務ムヘシ。……予ハ眼病アルヲ以テ、書ヲ読ムコト少シ。諸子疾アルニ非ス。宜シク博覧ヲ務ムヘシ。(『夜雨寮筆記』巻四)³¹

自らは眼病があるために、多読できず、「博覧」に努められない。³²しかし、門人諸子は「博覧」可能なことから、それに努めなくてはならないと、多読の大切さを説く。一方で、「経子ノ中ニ於テ、己力深ク悦フ所ヲ取りテ研究精思シテ可ナリ」。つまり、經典や諸子百家の著作に心を深く寄せられるものがあれば、その一節に深く思いを馳せることが肝要ともいう。右の引用は、次のように続く。

抑学者ノ務メ、見識ヲ以テ要トス。博覽ニテモ見識ナケレハ、用ニ立タズ。見識ノ要、取捨ノ二字ナリ。取捨ノ所生、二ツアリ。一二曰、博。二二曰、精ナリ。書ヲ読ムコト博キ時ハ、彼ノ是トスル所、此ニ於テハ非トシ、此ノ是トスル所ハ、彼ニ在テハ非トス。此ニ於テ、其尤モヨキ者ヲ択シテ、是ニ従フ。精トハ、其已ニ知ル所ニ付テ、尋思追究スルナリ。如此ナレハ、前日ノ是トスル所、今日ハ之ヲ非トシ、壮年ノ非トスル所ハ、老年ハコレヲ是トス。於是、其取捨ヲ定ム。若シ書ヲ読ムコト博カラサレハ、其一ヲ知りテ、其他ヲ知ラス。心ヲ用フルコト精シカラサレハ、老年ノ眼力、壮年ニ加フルコトナシ。是ヲ固陋ノ学ト云フナリ。（前）

淡窓は、学者の大切な努めは「見識」を用いることにあるという。「見識」とは、何を取り、何を捨てて、一家言を立てるかということであり、その基盤を担うものが、「博覧」と「精思」であると定義する。「博覧」は、選択肢がたくさんあるというメリットがあり、「博覧」である学者はその中から最も良いものを選択することができる。他方、「精思」は、一つのことを思索し続けることで、同じ対象を目の前にしても、日々新たな発見があり、そこから新たな展開が生じるという。一つのことを「尋思追究」することによって、前日の考えが今日は否定されたりする一方、若い頃否定していたことを年を取ってから肯定することもある。こういう取捨選択の継続が、一家言を立てることに繋がる。「博覧」なくして、選択肢はなく、「思索」なくして、厚みのある思考を打ち出すことはできないのだ。

「固陋ノ学」とならないために、淡窓が門人に説いた、学者が持つべき「見識」の基盤となる「博覧」と「精思」。自身は眼病が契機となり「精思」を重んじざるを得ない環境であったことは確かである。

このことが、前述の「精思研窮」に繋がっていったと想像されるが、その対象は経学のみであつてもよいはずである。にもかかわらず、淡窓にとつての対象は、漢詩、果ては、漢詩教育にまで至つたのである。その意味は、どこにあるのだろうか。

2. 「君子無故、琴瑟不離側」

淡窓が大切にした言葉がある。

古人 琴瑟を以て憂ひを解く。我は則ち吟詩談話を以て憂ひを解く。（『六橋記聞』巻四）³³

また、次のようにもいう。

答テ曰、門人詩人ノ多キコト、是予カ詩ヲ好ムヲ見テ之ニ倣フナリ。予強テ之ヲ勸ムルニ非ス。亦秘訣アリテ之ニ伝フルニモ非ス。今且ツ予カ詩ヲ好ム所以ヲ談スヘシ。経ニ君子無故、琴瑟不離側ト云フコトアリ。先儒其事ヲ論シテ曰、「今時ノ儒生、琴瑟ヲ学フニ暇ナシ。之ヲ学ヒタリトモ、和漢声音ノ道不同。古人ノ琴瑟ヲ玩ヒシ程ニハ、心ニ切ナラス。故ニ古詩ヲ諷詠シテ、心ヲ娛サメ、琴瑟ニ当ツルニ如クハナシ」ト。予少キヨリ深ク此説ヲ信ス。平生多病ニシテ、心思鬱悶スルコト多シ。如此ノ時ハ、必ス古詩ヲ諷詠シテ、思ヲ遣ルナリ。心思憂苦スル時ハ、古人ノ思ヲ神仙ニ寓シ、想ヲ雲霞ニ寄スルノ作ヲ詠シテ、心中ノ鬱滞ヲ盪滌ス。志気昏沈シテ振フコト能ハサレハ、古人ノ雄壮豪邁、乘長風破万里浪ノ氣象アル処ヲ詠シテ、以テ之ヲ鼓動ス。…卷ヲ開キ眼ヲ勞スルニ及ハス。如是コト四五十年、只是詩ヲ以テ一箇ノ琴瑟ニ当ツルナリ。然レトモ、誦詠ノ久シキ、身モ亦之ニ倣ハンコトヲ欲

シ、遂ニ又結構スル所アリ。故ニ予ハ古詩ヲ誦スルコトヲ好ムノミ。自ラ詩ヲ作ルコトハ、必シモ好マス。是其平生ノ作ル所、甚不多所以ナリ。門人ニ至ツテハ、皆力ヲ詩ニ専ラニス。後生詩ニ巧ナランコトヲ欲セハ、多ク作り、且推敲鍛錬スルニ如クハナシ。若シ必ス予ノ所為ニ倣ハントナラハ、先ツ古詩ニ熟練シテ、而後詩ヲ可作ナリ。（『夜雨寮筆記』巻四、『淡窓詩話』上）〔引用C〕と略す）

この一節は、門人・青木益が、咸宜園門下の作を収めた詩集『宜園百家詩抄』の盛行に触れ、先生の「詩訣」を教えて欲しいという問いに答えたものである。ここでも淡窓は、詩を「書く」ことにおける「推敲鍛錬」、そしてそれ以上に、詩（古詩）に「熟練」することにおける「推敲」の意に解せられよう）が前提であると繰り返している。

ここで私が注目したいのは「琴瑟……」の件である。まず、「経ニ君子無故、琴瑟不離側ト云フコトアリ。」の典拠を見ておきたい。

君 故無くんば、玉 身を去らず。大夫 故無くんば、縣を徹せず。士 故無くんば、琴瑟を徹せず。（『礼記』曲礼下）³⁵

君・大夫・士の立場にある人物の徳をいうものである。君子は、「故」（理由）がない限り「玉」「縣」「琴瑟」を手放さない。鄭玄は「故は、災患喪病を謂ふ」と注釈をつけている。淡窓は「不離」としているが、「不徹」は「不去」³⁶の意に同じで、淡窓の経典理解も同様と思われる。

興味深いのは、淡窓はここに「先儒」の「礼記」理解を引用している点である。「先儒」は、「今の儒者には琴瑟を学ぶ余裕はなく、たとえ学んだとしても、日本と中国とは音楽の道理が異なっており、所

謂中国の昔の人が琴瑟に親しんだ程には心を寄せることができない。だから、古詩を「読む」ことによって心をなぐさめ、所謂琴瑟にあてるのがよい」といい、淡窓は、この言葉を信じて生きてきたというのである。実際、眼病を契機としてそれを実践したという淡窓は、心が憂鬱な時は、古詩の世界に遊び、これを四、五〇年継続してきたという。

中村幸彦は『淡窓詩話』校注で、この「先儒」を太宰春台（一六八〇—一七四七）に求めている。淡窓が嘗て亀井南冥、昭陽に師事したことを鑑みれば、徂徠学派の春台を想定することは合点が行く。

太宰春台の六経略説「今時ハ歌フコトハ其法亡テ習フベキ様ナケレバ、只三百篇ノ詩ヲ誦シテ、其詞ヲ記憶シ、其義理ヲ知テ、古人ノ引用タル意ヲ会得スルマデノ事ナリ。カクノ如クニテモ、詩ヲ学ブトイフニ叛カザルベシ」（『淡窓詩話』校注）³⁷

春台は確かに、現在、歌に法がなく習うべき方もないと、昔あったはずの音楽の道理が現在欠如していることを前提とした上で、『詩経』を「読み」、詩詞を憶え、その意味を理解することが詩学だといってよいとする。

中村が校注に引用したこの一節は、春台『六経略説』の中でも「詩はうたひものなり」と、『詩経』をいう中に見える。これとは別に、「楽は、本君子のなぐさみなり」と、現在は散逸してしまった『楽経』に言及した中に、『礼記』の「琴瑟……」に言及した箇所がある。

論語に、飽食終日、無所用心、難矣哉とあるも、終日するわざ無て暮すは、難きことなりとて、世俗の勝負のなぐさみにてもするは、只あるにまさると孔子のたまへり。終日するわざ無て暮すの

甚不可なることをのたまへり、されば古の君子は、故障だに無ければ、常に琴瑟を側に置いて、間暇無事の時は、必しも一曲を奏彈するにあらず、爪しらべなどして、つれづれを慰しなり。是心を養ふ術にして、閑居して不善をなすに至るまじき為なり。（『六経略説』³⁸）

始めに『論語』陽貨篇「飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博奕者乎。為之猶賢乎已。」の理解が示される。春台は、一日何もすべきことなく暮らすことは難しいことであり、たとえ博奕であつても慰みとなるならあつた方がましだと、孔子のこの言葉を解する。『礼記』「琴瑟：」はここに引用されている。古の君子は理由がない限りいつも琴瑟を側に置き、あえてなすべきことのない時、一曲奏でるといふのではなく、撫る、触れることによつて「つれづれを慰」めた。春台のこの理解は、確かに、淡窓のいう「先儒」に繋がると想定されよう。

淡窓の物言いからは少し逸れるが、春台はこれを「心を養ふ術」と評し、「琴瑟：」は、間暇に不善をなすことがないための君子の修養術と理解している。春台のこの理解に典拠を求めらば、『性理大全』卷四十六「学四・存養」にも収められる楊時の言葉に辿り着く。楊時は、『孟子』告子上の「孔子曰、操則存」の意味を問われて次のように答えている。

曰く、古の学者、視聽言動、礼に非ざるは無し。心を操る所以なり。故無くんば琴瑟を徹せざれば、行へば則ち佩玉を聞き、車に登れば則ち鸞に和すに至る。蓋し皆其の放心を収めんと欲し、惰慢邪僻の気をして得て入らしめず。（『龜山集』卷一一）³⁹

古の君子は、全てに礼節が備わっている。それは、心を操る方法があ

るからで、その一つが「琴瑟：」であるとしている。楊時は、この方法は「放心」⁴⁰（『孟子』告子上）を収めようとするものであり、怠惰で邪な気が入ってこないようにと工夫されたものであると説明する。春台と同門で同時代の山縣周南（一六八七—一七五二）も次のようにいう。

音声は形なし。氣を以て達する故、物を隔て聞ゆるなり。故に人の肌膚に透り肝腎に徹し、能人の氣を移し心を動かす。：古は君子無故、琴瑟不離身といへり。凡音曲は鬱滯を導引し、邪穢を蕩滌し、氣血を和順し、徳を養ふべき物なり。心中斯須不和不樂、而鄙詐之心入之矣、外貌斯須不莊不敬、而易慢之心入之といへり。（『為学初問』下）⁴¹

周南の「琴瑟：」の理解は、音楽が「氣」を通して人に達するということが理解の要となっており、春台と比べて一層に「養氣」の意味合いが強いが、やはり、軸となる君子の修養としての「琴瑟：」の理解は同じだ。

春台や周南のように、『礼記』「琴瑟：」の一節を『孟子』「孔子曰、操則存」と併せて、「心を養ふ」「徳を養ふ」術として理解することは、一八世紀、經典解釈によつて自らの立場を世に示すことが常套である儒者にとっては特別なことではないように思う。それから百年程後、淡窓は、『礼記』「琴瑟：」を我が事として捉え、「先儒」の言葉を励みとし、琴瑟の代わりに古詩を常に側に置き、慰みとして暗唱し、果ては自分も古詩同様のものを作りたいと、詩作に至つたという（『引用C』）。百年を隔てても双方の『礼記』「琴瑟：」の理解自体は同様であると思うが、一方、春台や周南が言及したような經典解釈の記述は、淡窓には見えない。これをどう捉えるべきであろうか。

君子修養のための漢詩教育——むすびにかえて

淡窓の「琴瑟：」理解に、春台や周南のような「心を養ふ」「徳を養ふ」といった経典解釈に繋がる理解は見えないが、淡窓が門人たちに漢詩教育を行ったことの意味を考えた時、そこには同様のものが流れているように私は感じる。

淡窓の言葉通り、『礼記』「士無故、不徹琴瑟」を、先儒の理解に基づいて「只是詩ヲ以テ一箇ノ琴瑟ニ当」（引用C）てたのであれば、淡窓は、間暇に不善をなさない方法として詩を用いたことになる。それは、君子の在り方であり、「士無故、不徹琴瑟」ならぬ、「士無故、不徹詩」の実践といえよう。だからこそ、常に詩を側らに置くことで培われた淡窓の「精思研窮」という在り方は、門人達に繰り返し説かれ、学者として必要な「見識」を養うものとして位置づけられているのである。これは既に検討したとおりだ。

そうであれば、「口何トナク熟読シテ、其風味ヲ知ル」（引用B）のがよいとする淡窓の断定的ではない物言いも、そして、自らを「神韻派」と称すことがなかったのも、更に、回顧して自らの思想・詩作の変化を認めることも、全て、一つの立場や方法論に囚われることなく、日々「精思研窮」すること、その行為自体にこそ意味があるという在り方に他ならないのではないか。

中村幸彦は、一九世紀の詩話を概観して次のようにいう。

彼（山本北山・一七五二～一八一二）の二書『作文志毅』『作詩志毅』をして、経世即ち儒学を離れた文学論ならしめた。これ

までの護園や国学者達の思想的文学観、云わば哲学的文学論ではなくて、文学側からの文学者的文学観となっている。この後の広

瀬淡窓の如き儒者も、詩を論じては、文学的な発言が多くなっている：（『近世文学論集』解説、一・近世文学観の推移の概略）²²

中村の概観するとおり、詩文論においては、一般に一八世紀が「哲学的」「思想的」であるのに対し、一九世紀は「文学的」と称される。淡窓の「琴瑟：」理解をみるにつれ、その一面は勿論感じられるが、淡窓の漢詩教育の意味が「精思研窮」することにあるとすれば、それを「文学」にのみ帰結することはできない。というのも、「琴瑟：」の一節と、淡窓が詩を学び教えることの意味を重ね合わせた時、そこには「心を養ふ」「徳を養ふ」術があり、門人たちにもそのような君子の徳を教授しようとした意図が存在していると解せられるからだ。一九世紀、「哲学的文学論」から「文学者的文学観」へという転換はたしかにある。しかし、教育者・淡窓の在り方には、君子修養のための漢詩教育という一貫性を読み取ることができるのではないか。淡窓が春台を「先儒」としたことから推せば、そう理解されるのである。

1 淡窓の学校教育の特質については、前田勉「広瀬淡窓における学校と社会」（『愛知教育大学日本文化論叢』一七、二〇〇九年）。また、漢詩教育については、向野康江「広瀬淡窓による漢詩教育のありかた」（『茨城大学教育学部紀要』、二〇〇四年）、肥田明啓「広瀬淡窓の詩論と咸宜園教育との関連」（『立命館文学』、二〇〇〇年）、「広瀬淡窓の詩論とその源流」（『学林』京都藝文研究会、一九九九年）などがある。

2 白石真子『太宰春台の詩文論—徂徠学の継承と転回』（笠間書院、二〇一二年）

3 廣瀬青邨（一八一九—一八八四）。淡窓に師事し、淡窓の養子となる。淡窓は、弟・旭莊の長男・林外を咸宜園の後継にしようとする。

したが、年齢を鑑みて青邨を養子とした。青邨は四四歳の時、林外に咸宜園を譲っている。

4 本稿で引用した淡窓の底本は次の通り。本稿注での頁数は次の底本に拠る。なお、文意を損なわない範囲で常用漢字を用いることとした。また、典拠として複数並記したものは、前者を引用の底本とする。

・『懐旧樓筆記』五六卷（『淡窓全集』上 増補版・思文閣・一九七一年）

——天明二年（誕生）から弘化二年（淡窓六四歳）まで。淡窓六五歳から六九歳にかけて修改された。

・『醒斎語録』二卷 林外・中島種任筆録（『淡窓全集』上）

——天保二年淡窓五〇歳から天保十一年淡窓五九歳までの筆記。

・『夜雨寮筆記』四卷 門人筆録（『淡窓全集』上）

・『六橋記聞』一〇卷 林外筆録（『淡窓全集』上）

——巻一～三は嘉永四（一八五一年）年淡窓七〇歳の頃の編纂で、『灯下記聞』と題される。

・『遠思樓詩鈔』初編二卷、第二編二卷（『淡窓全集』中）

——初編は淡窓五六歳上梓、第二編は淡窓六八歳上梓。

・『淡窓詩話』二卷 青邨校訂・明治一六年刊（日本古典文学大系九四『近世文学論集』中村幸彦校注、岩波書店、一九六六）

——『淡窓全集』中、及び、向野康江訳『現代語訳 淡窓詩話』（葦書房、二〇〇一年）を適宜参照した。

5 「論詩 贈小関長卿中島子玉」

歌詩写情性 実随民俗移 風雅非一体 古今固多岐 作家達時変

沿革互有之 苟存敦厚旨 風教可維持 昔当室町氏 礼楽属禅緇

江都開昭運 数公建堂基 氣初除蔬笋 舌漸滌侏离 猶是螺蛤味

難比宗廟儀 正享多大家 森森列鼓旗 優游両漢域 出入三唐籬

格調務摹倣 性靈却蔽虧 里贖自謂美 本非傾国姿 天明又一変

趙宋奉為師 風塵弘陳語 花草抽新思 雖裁教辟志 転習淫哇辞

楚齊交失矣 誰識烏雌雄 寄言閔及鳥 更張良在茲 鷄口与牛後

趨舍君自知 我亦丈夫也 李杜彼為誰 誰明六義要 以起一時衰

（『遠思樓詩鈔』初編一八頁）

6 『淡窓詩話』上三三三頁

『淡窓詩話』下三九八頁

8 『広瀬淡窓 広瀬旭莊』解説三二一—二頁（岩波書店『江戸詩人選集』第九、一九九一年）。また、田中加代『広瀬淡窓の研究』「生涯の時期区分について」一〇九—一二三頁（ぺりかん社、一九九三年）にも淡窓自身の意識変化への言及がある。

9 松下忠『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその撰取』下篇

「明・清の詩論」（明治書院、一九六九年）の区分に拠る。

10 『懐旧樓筆記』巻八・九九—一〇〇頁

11 「古処」は原古処。亀井家の五傑を「五亀」と称し、南溟を中心

に据えていえば、曇栄（南溟弟）、昭陽（長男）、雲来（次男）、

12 大年（三男）を指す。

13 後年には更に、「唐宋詩醇ハ善書ナリ。但古詩ヲ学ブニ宜シ、近

体ニ切ナラズ」（『淡窓詩話』下三八五頁）との考えに至る。

14 『淡窓詩話』上三三四頁

15 淡窓が江戸「性靈説」において誰を対象として論じているのかを

ここから決定するのは難しい。但し山本北山、市河寛斎、大窪詩

16 仏、菊池五山らが代表的な人物として挙げられよう。

17 太田青丘『日本歌学与中国詩学』附録「広瀬淡窓の詩学」四二—

一二頁（弘文堂、一九五八年）

18 松下忠『江戸時代の詩風詩論』（明治書院、一九六八年）六七八

- 頁及び六八二頁など。松下も太田説に言及している。
- 18 汾陽孔文谷「天胤、文谷は号」云、「詩以達性。然須清遠為尚」。薛西原「蕙、字は君采」論詩、独取謝康樂・王摩詰・孟浩然・韋応物。言「白雲抱幽石、緑篠媚清漣」清也。表靈物莫賞、蘊真誰為伝」遠也。何必絲与竹、山水有清音。景辰鳴禽集、水木湛清華。清遠兼之也。総其妙在神韻矣」。神韻二字、予向論詩、首為学人拈出。不知先見於此。
- 19 南肥沢村九門来問詩訣。大人以詩答之曰。「彫績争裁織巧詞 東方詩教久陵遲 君唯勿失真情性 兩宋三唐任所之」(『六橋記聞』卷七・七八頁)この一節は『淡窓詩話』未掲載。青邨が採らなかつた理由は定かではないが、文章ではなく七絶という詩で答えたところが言葉足らずという判断か、あるいは、「詩は兩宋三唐」と時代を限つた点が後年の詩論との齟齬があるという判断か。この点については更に検証を要する。
- 20 澤村西阪(一八〇〇—一八五九)・熊本藩儒を指すか。
- 21 『懷旧樓筆記』卷八・九九—一〇〇頁
- 22 『夜雨寮筆記』卷四・五一—二頁。『淡窓詩話』上三七六—八頁にも一部を引く。「」は筆者が付した。
- 23 『淡窓詩話』下三八八頁
- 24 引用AとBはそれぞれ上巻と下巻に収められているが、引用Bは『淡窓詩話』にしかみられず、淡窓いつの発話か未詳。ただし、引用B「前述セシガ如シ」の「前述」は、中村校注のとおり引用Aを指す可能性があり、また、その内容から推しても引用BはAより後の資料であろうと推測する。青邨が『淡窓詩話』をまとめるに至つた経緯については、検討を要する点が多々ある。
- 25 『夜雨寮筆記』卷四・五〇—一頁及び『淡窓詩話』上三七五—六頁。また、『夜雨寮筆記』卷四・四三—四頁及び『淡窓詩話』上三六
- 26 五—六頁など。
- 26 嚴羽『滄浪詩話』に「詩は情性を吟詠するなり」とある。それに基づいて、伊藤仁齋「人情は詩に尽き」(『語孟字義』総論四経)、荻生徂徠「夫れ詩は情語なり」(『徂徠集』卷二五)などが、淡窓に先行するものとして認められる。
- 27 『淡窓詩話』上三六五頁。嚴羽『滄浪詩話』に、「大抵、禪道に惟だ妙悟在り、詩道また妙悟在り。」
- 28 「人各有所悟入。帆鵬卿曰、和人作文、譬如獼猴演劇、可以為奇、不可以為巧。是鵬卿所悟入也。予嘗曰、詩文能使讀者不倦、乃可称名家、是予所悟入也。」(『六橋記聞』卷三・二八頁)なお、同じ「悟入」を扱つた資料でも、この一節は、本稿引用の前後の資料に比べて淡窓が若い頃に書いた気配がある。この点については稿を改めて検証してみたい。
- 29 『淡窓詩話』上三五六頁
- 30 『淡窓全集』上一—二頁
- 31 『夜雨寮筆記』卷四・四三—四頁
- 32 淡窓が生涯に渡りさまざまな病の不安を抱えた中で思想を形成していったことについては、高橋文博「広瀬淡窓の不安—その自己と調節的なるもの」(季刊『日本思想史』第十九号、一九八三)などに見える。
- 33 「古人以琴瑟解憂。我則以吟詩談話解憂。」(『六橋記聞』卷四・四〇頁)
- 34 『夜雨寮筆記』卷四・五〇—一頁及び『淡窓詩話』上三七五—六頁。「」は筆者が付した。
- 35 「君無故、玉不去身。大夫無故、不徹縣。士無故、不徹琴瑟。」(『礼記』曲礼下)。また、『礼記』玉藻に「君子無故、玉不去身。」とあり、これに関連して鄭玄は「比德焉。君子士已上。」と注す。

- 36 ちなみに『太平御覽』琴上にも『礼記』曲礼下の一文を引くが、そこに「不去」とある。また、後に引用する周南『為学初問』は、淡窓同様「不離」とする。
- 37 『淡窓詩話』二七五頁校注三二。
- 38 太宰春台『六経略説』（『日本倫理資料彙編』卷六、一九〇二年）
- 39 『龜山集』卷十一「語録」二「問『操則存如何』曰『古之学者、視聽言動無非礼。所以操心也。至於無故不徹琴瑟、行則聞佩玉、登車則和鸞。蓋皆欲収其放心、不使惰慢邪僻之氣得而入焉。…』」
- 40 『孟子』告子上「学問之道無他、求其放心而已矣。」
- 41 山県周南『為学初問』（『日本倫理資料彙編』卷六、一九〇二年）
- 42 前掲注7、八頁。なお、引用に際し（ ）内の注は筆者が付した。